

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	あぢきなさ : 詩歌
Author(s)	葉二
Citation	龍南會雜誌, 152: 91-92
Issue date	1913-11-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6295">http://hdl.handle.net/2298/6295</a>
Right	

ちやるめらの部落行く匂ひ、  
目籠の頼のかすく  
手まさぐる若きかひなに  
やるせなき柔毛の震慄。

さんたまりや、をどめは謠ふ  
混血の舌の震音、  
祖先を故國を想ふか  
優雅に鬱憂に。

空かほる潮の遠鳴り、  
瑠璃色の沖走る帆は  
おらんだかはたほるとがる  
見る目憂きざぼんの烟。

あゝざぼん、芳烈の香に  
噎び泣く俚謠の色彩、  
うち、震ふその唇に  
はにかみの甘き接吻。

あぢきなさ

—Xの君へ—

葉

二

暫らくの別れのきはに猶もわが云ひ得ぬ心あぢきなさかな  
踏み越わし七重の山をかへり見て淡き誇に街に入りたる  
幸ありと思ひし夢のさめしころ世にはなれたる心ちするかな  
夜汽車待つ山の小さき停車場にわれをめぐりてこほろぎの鳴く  
葉鶏頭薬園町の杉垣のあひより見えて秋晴るゝかな

われとよく争ふ妹我が居間にさうび持ち來ぬ秋立ちければ  
うす黄なるほぶらそよげり秋立ちし病院うらの濱の夕日に

## 瘡 痕

永劫とこほに癒わがたき胸の瘡痕よつとめはげみて唯なくさめむ  
男の子われあゝこの度はこの夏はかならず人に勝たむとぞ思ふ

春 秋

ついでついでとんぼ

鏘 乎

月夜涼み場満ち潮サラと遠淺に  
萎み葉に飛ばぬ蟬のあり遠雷す  
早り野路を遠埃する管笠が  
今日もく雨待ち宵を蚊食鳥  
遠のき雷ひき水音冴に青嵐  
醫師呼ぶと町へ夜人力車を稻妻す  
火に識りし谷間の家もきりくす

よな、白き草を秋風山下りに  
店に聞く琵琶など温泉宿秋たちて  
霧裂けて放し飼牛の裾野廣口  
乳母歸ると泣く子を蜻蛉秋晴れに  
落ち釣瓶探朝る寒を姉病めり  
大悟の朝雁來紅に月淡し  
折詰もふらと濠沿ひ天の川  
遠乗馬水かふ萩に魚影して  
小春祭日障子張る日椽病後に